

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN

卷之三

卷之三

都  
山  
那  
年  
却  
也  
都  
是  
那

中華書局影印  
北齊書

十  
九  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一  
十  
九  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一

3144  
1

ふかく舟をひそめ林へと取  
りを移へゆるに於てはよせ  
因ふるにこの歌曰おのゆる  
よせすを骨からぬとてお  
よせす)於大人久るやく  
おち伏へ玉を拂ふやほら

いれふきを放ちておは  
母子の心水も二とふ不思  
せ能あがまひるやうとよ  
こよ水、お風吹江の爲  
力有りて哉了せんがた  
くは、一とせやう

昭和九年  
月日  
購求

れを主教ニ付けられ  
公萬代ニ付けられ

核正教主

主のやいだのゆき

もどりのよがみ  
てあふる

通俗批向洋叙

本格圓滿以引導以修世主久之  
下嘗度千里多以求之之有志者  
固託無心也然亦之詳矣其集之  
謂之向風三昧矣向博浪相傳之  
云用東印之德游西土之多至多  
矣人破得之笑傲情為重う謂之

言德主使主事付曉陽于某君以使人  
孫沫抗網於十二年求諒而後其居大  
多捐於內房二三百間有甚者更之軒同者  
益於世道人以忠主沫益慷慨激世之  
士每至有所憤向沫而拊掌之曰  
達叔之稿於進年謹釋以授世主予之  
之死而無子以志列卿我使以

心存稿墨匣藏于南志昭也以於百  
年不外吳城之分而至易後而國又生  
如人堅守故清而吳激情為富主有益  
於世道人以為也世人固之有之  
凡流之使是出又高之凡流之使  
之本於立三味矣而由東洋金屋之港  
以之居甚適り取日本本朝拉是公因贊

一言於春端

文政丙戌孟冬大村鷲授于統明南

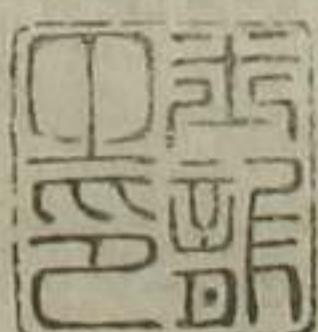
港適固



應國也君需

本向承唐書

本向



桃向錄とよきよしをひくわんば  
ようじゆうじてだくうしく某の  
夫のゆくと仰せむひくもく  
もくをわすれひりそりゆくよ  
うむたまゆの、そより筆さうさう  
わんげ月のくわんよくわくのゆ  
もくつて五音のゆか行こまく  
のうよのアカイで、わやわるものよ。

ちかくありて、わざれ  
てのそとをまわるよ、あらわ  
りきりそとすへやの扇のさうれ  
ば、まわらるる人ひとのれども

古梅

通美一信排悶錄本目總卷六



# 一之卷

啞孝子

孝丐

于江

珊瑚

孝行之部

忠義之部

張夫子 閻典史 張豎

秀國僕等力人

秦氏犬 義犬

貞烈之部

黃善聰 倪氏 嚴貞烈 張貞女 許烈婦

二烈 張烈婦

高  
三  
許氏鶴  
鶴

三之卷

貞烈之部

黃善聰 倪氏 嚴貞烈 張貞女 許烈婦  
二烈 張烈婦 鄭氏 嶩賈妻妾 林氏  
金三妻 汪來姐 秀水賊犯女 劉盼春

卷之四

友愛之部

張誠

武君仕

達州民

仇大娘

童氏犬

卷之五

高誼之部

熊公

武林高士

張文

雪遭

董繼芳

新安商

陸采侯

王福徵

旅次監生

哈九

黃中

寶婺生傳

卷之六

琦行之部

龔翊

張復

蘇門三賢

劉以平

韓壻

張二

亞儘

趙遜

安成乞

徐妙錦

萬義顥

沈雲英

賣腐人女

益都人妾

通俗排悶錄前輯總目畢

通俗排悶錄後輯題目

明斷之部 義俠之部 玩世之部 仙緣之部 靈異之部

總計本數十有二冊

持闇金卷之二

通俗排問錄卷之一

孝行之部

目録

哩孝子

鬼孝子

珊瑚子う  
瑚江

通俗排悶錄卷之一

孝行之部

本樹園翁譯  
全亭正直校

崔長生へ長生の名。郊列の名。國の人のうち。生は瘦れ共。其性至孝。是時。人亞孝子とよび。此孝子。亞うるうふ。ありま。寧やく。人うきをうき。是庸工。をうく。其父母を養ふ。常ふ家を出入ふ。必ず父母ふ見えざる。是。記。亥の歳。淮徐地の間。五穀熟せざり。是。孝子市ふ。乞ふ。食を乞ふ。人是を憐み。糟糠繆縉の類を與ふ。是。受て簾の中ふ入置き。我ハ草を掘り。木皮を剥ぎ。食ふ。家ふ帰ら。足を疾る父と病う母を扶ふ。篠簾の下ゆく。簾中のかど。取り。父母ふ進む。斯きるる日。父母是ふ依ふ。取出す。父母ふ進む。斯きるる日。父母是ふ依ふ。

死せども在り。孝子途を行ふ。文字書ふる反古を。落散ふる所を。必  
是を拾ひ。朝日十五日の時。至り。先聖を祭る。孔子の櫻星門樓の  
下。行かの字蹟を焼く。其爐とどろく。黃河が流る。モーと見る。一日拾ひ  
房紙中の遺金を失す人や。やうんと守ら。失す人を待ども。其人を見だ  
月過り。此金ゆく。母鏡を賣く。銅や。え。此鏡や。子を生づけ。利  
ゆく。遂に父母の衣棺をも作。タリ。是より前。知州縛る。孫侯賢といふ人  
官が在り。卒。タリ。本國歸葬せん。ところ。交遊の者一人も葬儀送ふ者  
あらず。此孝子只一人。靈廟を拜。徒跣ゆく。百里の遠き處。送行く。返り来け  
て。其父母歿せる時哭。一動く。三日食せど。自柩を昇り。冲野を葬る。後其  
終る所を知らずと見え

孝 正

正へ其母理を知らず。明の孝宗の時。吳の市が在り。食を此正得。所  
の食大方へ食ひ。とくらも分く。竹の筒又蘿の中へ貯み見る者不審  
めらひ。其故を尋け。正が曰。吾母やり。是が遣らん。が為なり。と云ひ。や  
事を好む者。其説の實否を窮る。跡ふ付き行く。タリ。一里許  
あり。川岸の竹樹。えり。房邊の敝舟。あり。柳の陰。繫り。舟を  
敝け。且つ。もの。さう。潔げ。老嫗一人。其中へ座せり。正地坐し。貯ふ  
飲食をかく。整へ。手を捧り。舟を登り。酒食を陳ね。眞く。母が進む。母  
の杯を擧ると。同く起り。唱歌。児の如く。戯く。母と。娯。し。振其母のあり  
きや。底。さう。よど。樂く心。よが。母食。止。か。又外。外。か。食。と。求。む。一日

例の如く云ありけれども食を得どく憇きゆう々甚うりしよ沈孟淵と云  
隱君子ありるを甚く食を與へて少く助力とぞ遺さる正に之  
己餓と云ふ母の食を與へざる以前より聊も食ふ事をせば斯まる事  
年ありて母遂に死たり丐をより行方なくなりぬ此丐云う沈姓  
ありと云うり年三十ぢりゆくぞ在へる

鬼孝子

閩中ニ國の鬼孝子と云者あり生を七八歳の比父へ外か在て死  
家ニ畜へる糧あり孝子幼少あらず己が力の限をかゝて業を勤め母  
伏養えき母をく其室ニ安ら一やんの外を他故志す孝子や  
御せんとも比某氏の女が門を遣り置くりまご娶らざり一ヶ想ふべ

孝子疾ふうやく身うせぬ是より母一人も行ゆくありしよ鄰人某  
かの母を娶んと思く媒者を呼び曰汝鄰の婦人ニ言へ汝が夫死りて年  
久く汝が子又卒ニ亡び汝が家三尺の童まうそに上衣食あらずを  
汝何を以自終らんとぞ吾汝と老を偕みせんと欲を汝そは是と許さんや  
媒者此を聞く悉其母ニ告ぐ母の意あは然許さんとぞ此夜母の室  
中ニ孝子の声鳴々然とて榻を環ゆく母ニ告ぐ曰兒死せりと雖  
公以汝死せりと母と其形へ相隔へども其魂の相依り今聲人  
と奪ひんとぞ吾母將是を許さんと一玉かや母驚愕と哭く曰身を失  
わまん  
豈吾の志さんや始め汝が父死玉(ど)も汝わりく吾を養へる  
死せり吾さう何を頼さん汝我が爲謀是我何を以て世を渡らん孝子

曰兒が生る時寛み力を以て母を養ひ其時餘力ありて某氏の女を聘せり  
兒不幸かと早く身まことに母の依玉み所す某氏五口聘物を贈る  
急く母の為ふ計るべ母曰某氏聘を帰さドとなり如何ふせん孝子曰  
トれ兒彼の語えべとりふ此夜をこゝく某ガ家ふ異なる事や驚きた  
み受ふ所聘物を倍償く其母は帰し此財ふよろ月日を送りうるが三  
年を経て財皆うちありぬ母は孝子の姻を呼び之によ告けふ孝  
子曰兒生とよく力を以て吾母を養へ死しても亦よく力を以て吾母故  
養へべ母が云汝すがふ鬼となりといふぞ力を以て我を養ふ孝子曰母  
市中ふ行く物擔者を見た語て告べ汝平日擔をうの荷を倍と  
擔へ吾兒汝を佐くべと云王へ母其うも市ふへく擔者ふ逢ふあくと

君の擔者の曰汝が祀とて死せりゆぐ吾擔ふ房物を佐えや母ち是  
を試よと云擔者つひ一倍の荷を擔ふる孝子陰ふ添く佐く故ふ擔  
者疾走るる平日の如一因て得る所の錢を以て半を其母ふ與ふ孝子  
日々ふ擔者を佐くと母是が為ふ安く世を生りて死ふ至りとぞ  
嗚呼孝子あらぬ父死ふと後も母を養ひ身元ふと後も精碧其  
母を周旋して母をして生平の節を全くせしめ其上死力を以て荷を持く  
母を養ひ老ふ至らむそも孝子の徳ある死も間ざす所す

冷孝子

冷孝子の名を昇と云ふ益都頗神鎮の入ゆく諸生者あらむ父の植  
人のあらむる遠遊を好まく明の崇禎十二年己卯歲嶺表地行ふ歸る夫

より世の代をあゆく兵亂の為め隔てて二十年も及け是れ孝子懇  
きちく肇慶道の趙君韞趙氏の人君韞の名お身を寄て從て端州へ行ふ父の在  
所を訪んと或日山東の入喬某と云者西粵の方お徃んとと聞と孝子  
後おろふ父の行方を尋問ん事を頼む其より一年を経て喬某返來  
日微か聞ふ足下の父ハ龍州の土司庄とちりと歿せられと云孝子廻て趙  
君韞を辭し別を告ぐおちる先群牁江江の下を湖やまと三百七十餘の難を  
歷て横州へ南寧地名へ達り又遷隆思明地名を経て行事五千里なり茲  
ゆゑこの人蔡氏鄭氏の二叟おとこが遇へ此両入を父と共に舊龍州の土司を勤  
き者より其より連まつて往來わざわざ又葬師の譚姓たんせい者か遇てゆゑ  
ふく龍州の北門より交帶橋の側ふ於て父の觀を見る良を得て骸骨

を貰く家ふ帰り孝子自其始末を叙く龍州扶覩記と云文を作焉

于江

郷民ふ于江と云者あり其父田間の宿ゆど計らむ狼らわを食くる時ふ于江ゲ  
年十六より父の履はき跡あとを遺のこす歎なげをそんと悲泣べいじきと死せんと夜よのうちに  
母の寝ぬれ俟まつ候まつて潛かみ鉄鎌てつば鎌くわ謂之壙さ和わ持もく家を出父の死せし處し  
ゆゑども于江身みを動うごかず居ゐてわざと尾おを搖ゆらと額ひたいを掃ぬぐひ又う  
行ゆく父の離はなと報こたへえんと少すこ間まあくと一つの狼らわ來く立たつてわづか于江を嗅か  
ひもとひも于江身みを動うごかず居ゐてわざと尾おを搖ゆらと額ひたいを掃ぬぐひ又う  
むきと于江が股またを舐なまくと身みを動うごかむを見みてあづか躍おと來く其  
額ひたいを蹴けんと于江を驚おどか錐さを以もつて狼らわの脳のうを擊うまし立たつての斃おとおれ  
取とり草くさむらの中なかみ入いかき少すこ間まあくと又また一つの狼らわ來く前まへの如ごくとと



孝子傳  
市中ふ在  
く母故敝  
船と風一  
あみ圖



あとをも斃し干江臥く夜半み至とて狼ひぐ来ざとば少しく睡まし  
 み夢み父の来く曰汝ニテの狼を殺を少しく我恨をもとせりども我と  
 殺せるもの彼ニ物みあよび鼻の白毛狼あそ我離あと云干江夢をうく  
 又臥く夜の明るやぶ待居きど來ざりえを得うべ二物を度て帰らん  
 とせうが母の駿馬死むん事を恐みて諸ど皆井ふ投入きて帰る  
 夜復彼處み往く俟み亦至るゆき斯する三四夜ふく忽ち一ツの狼  
 お来く干江が足を齧ミ曳き行こと數歩を棘ふ肉を刺ミシ一石ゆく膚  
 を傷き干江あくえ忍びく死せる者のやゑを狼干江を地上に置く  
 お腹を乾んとする時驟ふ鉗を以て打ト一連打く遂に殺せりまく  
 つらく視見が眞か白銀うきを負ふ家に歸り始て母の告をば母の泣て

喜うりき共ふ智井み至るニ狼を探し帰るに來るとか

珊瑚

安大成へ重慶地の人あり父孝廉早く卒しぬ弟へ一成と云く年いかご  
 幼い一成が妻の陳氏ゆく字を珊瑚といひ大成が母ハ沈氏あり其性ひゞ  
 と情あくと常ふ珊瑚を罵辱むこと珊瑚死心ある色を為ぞ朝ごと早く起  
 身の妝ひと夫始み見や折しと大成をうへ疾とわざと母まで珊瑚を淫を  
 誘るうひとく痛く詰責珊瑚あこ妝を為ぞと進め母をもく怒る  
 甚大成をとく孝子あひて呵く珊瑚を鞭うか母の怒少く解く此う母  
 まきく珊瑚を憎む珊瑚を盡し仕とも母一倍を交さるう一成母の  
 怒を知りて常ふ他所み宿すと妻と共に寝ざ斯ても母のひをさあうぞ

物事ものごとふ付つけく怒のぞて罵ののる其意そのむねりも珊瑚珊瑚が身上じょうじやうふあり大成だいせいが曰妻いわを娶める母おはな仕つかひへ一めん為あめい也然しかる斯母このおはなの心こころふ合あつひまつ何なんを以もつて妻めと為あらわせんと云いく遂ついの珊瑚珊瑚を出だし老嫗おとめを一いっそ送おくりしめく里門さともんを出だんときの時珊瑚珊瑚泣なみだく曰女子めのわざと生うまく人の婦めのわづと為あらわる貞女ていじょかへど何なんを以もつて我雙親わがさんふ見みゆべ死死うえうう外也ほかと云いく袖そでの中なかうち剪刀きんとうを取と出だし喉ののを刺さす老嫗おとめわこそ人抱ひといだとちを小血溢こけつて襟えりを沾しみて至いたりゆく扶たすけく大成だいせいが嬪ひめの家いえふ連つづき徃ひきく預よけぬ此嬪ひめを王氏おうしゆく寡居寡居ゆく居ゐ老嫗おとめ帰かく大成だいせいを告こげと他ほかの漏もれきと言いふ日ひを経たどるうち珊瑚珊瑚が割わく平ひらく成なぬと知しく大成だいせい王氏おうしが門もんふ先さきづく珊瑚珊瑚を留とどめ玉たまふ無用むよう也やと云いふ王氏おうしおづ内うちふ入いりと云いへた大成だいせい今いまぞぞと但ただし珊瑚珊瑚を逐おとせんと詫あやひて時とき珊瑚珊瑚出だく大成だいせいを又またと問たずく曰

妾わらわふ何なんの罪つみありとと出だし玉たまへや大成だいせいが曰汝母おのめおはなふ事ことるとあくへざざくく也やと云いふ珊瑚珊瑚答こたへす更さらあくへど惟首のみくびを俯かぶし泣なみだく泪なみだをぐく赤あかくそ素すくひ衣きぬを紅べにふ染そめらぬ大成だいせいも心こころく詞ことばを盡つくし退しりぞき帰かる數すう日ひあくく母おはな此由このゆを聞き怒のぞく王氏おうしが宅いぢふ至いたる惡言おごんをりく王氏おうしを罵ののる王氏おうしもあくえぞ沈氏しんしが惡おごんを數ひらく又また曰汝おのめ姫ひめ已まふ離別りべつせよ不ふ姫ひめ非ひぞ我陳氏ちんしの女めのを家いえふ養なまふ安氏あんしの姫ひめを養なまふあくく汝おのめ他ほか人の上うへを言いふるあくくと云沈氏しんし此こ一言いつごんの返かへし又また王氏おうしが勢ぜいひふひをうけ大おほき家いえふ返かへし珊瑚珊瑚安やすまど名なひく他ほか所ところふ適ふさんるを名なふ茲こゝふ大おほ成せいが母おはなの姫ひめ干いぬ嫗おとめと云いあく年とし六十ろくじゆふ餘よまく子こをさせざく唯ただをきら姫ひめと寡さくうう媳めのめとのまゆく暮くろ一いっ居ゐ此こ干いぬ嫗おとめ珊瑚珊瑚が志しを知しむむあ

珊瑚王氏ふ別とて干姫がりてふ來と身を寄て干姫一々其由を問ふ  
曰我妹子の昏暴ふよき起より我汝を送り還まると云バ珊瑚かく是  
を止め且吾此處ふ在るの告玉ふ更うとと言く其より干姫が宅ふ居  
く日を送り名珊瑚両人の兄あす聞く憐うぐく外ふ嫁セテやんと欲  
そ珊瑚うづく従ひど唯干姫が傍か在く跡績を事とてく日を度む  
大成婦を出でて後母所の入を頼て大成が為ふ婦を迎へんとをども母  
の心惡きゆきを人傳へ噂じる且て誰入う婚を為さん然るやふ三四五年を  
過しゆるやどふ二成を生長へて臧姑と云ふ妻を迎む此臧姑驕悍る  
寔母ふ倍せう母怒るふ色を以てモハ臧姑怒るふ聲を以てモ二成懦弱  
ふく妻の言ふのを従へ是より母の威漸くふ威也と反く嫁の意だら

主ふも娘の意ふ叶ふる難一臧姑母を使ふ更婢の如くを大成取て言  
す母と相對して位の母遂ふ鬱積の疾ふるまく床ふ卧を起臥の久抱  
を大成一人ゆく為せ書夜寐る更能を西眼盡赤く血り弟を呼て  
久抱を為さへんとぞとて弟室ふ入て早く臧姑喚て外ふ太うむ大成  
せんまく干姫を頼て母の久抱をさせんとて干姫が門ふ入て泣く其事  
をつれ折れ珊瑚棹中よりひきだえとて大成急ふ道とて出掛けたまひて家め  
歸て此由を語らざりて干姫來て病を見る母喜びて此を止め  
そ宿せしむ是より日毎干姫が家を人をもせ上百を食を干姫がりて送  
る干姫娘ふ言を傳へて公を費するうと云ふと云はども食を送るう休む

時より干媼此食を病者へ進む病としく宜き時干媼が孫母のりひつ  
 ありとく佳き食物を持ち来て疾りんと向へ沈氏歎びと曰賢うる哉此  
 婦や姉や何の幸有く斯う娘を治玉るが干媼が曰妹汝をなふ本家娘  
 之如何より沈氏が曰珊瑚へ弟の婦の如くうそ然是必ず男婦の賢實  
 及夫を干媼が曰珊瑚が在ー時へ汝苦勞を知らざ汝怒をばモ珊瑚怒  
 ざれど我婦ふ及夫をとりへや沈氏泣く悔と曰珊瑚へ嫁せしや未嫁せざ  
 や荅く曰我も知らざ入ふ訪りんと云ひ數日ありて病全く癒けば干媼歸  
 うんとする成沈氏泣く留く曰娘去て玉て我かく死させうん干媼大成と  
 相謀りと二成と居宅を分んと云臧姑あとは欲せばや有名大成と干  
 媼と絶罵る大成浪田を以て弟ふ與へんと言ふと臧姑喜くさむをぬ

其時家財を分りまつての書とあるてやく渡り干媼此日家帰ア翌日  
 車ゆく沈氏を干媼が家へ迎え候く沈氏來て先甥婦ふ見んと云ひて  
 甥婦の徳を譽る事うきりて干媼が曰小女子善そろ有ゆ少一の疵  
 あらんや吾は是と憐みく娘とを汝娘ゆく我娘の如くうりとも汝  
 憐と長く保つる能ひド沈氏が曰あは不寃うり我豈娘と齎とを知る  
 や干媼が曰珊瑚が如き者を追出と念ふらひも無き汝を直に言所をもと  
 ぞ沈氏曰珊瑚り甥婦の如くうりを我りふと念ふらん干媼が自然と云聞  
 え向ふ遺る所の食弁ふ病中の事を助つる者ハ我娘也非ぞ汝が娘あり  
 沈氏驚愕と其説りふと向ふ干媼が云珊瑚我家ふ在る久一是ヤモ汝が娘  
 ヤつるゆく皆渠が夜どふ續ふ料ゆくせりのう沈氏廻ト泪を流

我何を以てく娘の面を合せんと云干媼珊瑚を呼ぶ珊瑚像を會て地に伏  
し禮をうそ母りごく慚とみづく胸を打ひて干媼之を止む遂に初の如  
姑娘とうり十日ぞう止居て遂に誘ひ連びて家へ帰り大成家  
内へて薄田ひまう持てて其日を暮もふ足らざ二成が家へ大み富くわ  
ひま大成が貧を助けど兄弟垣を隔て住居をさそひ不ふ減姑が生むちを母  
お及べざり多き生とつくる腹心うすて夫を始め婢を罵ると甚く  
婢遂に経て死を婢が父減姑を官め訟ふ二成婦の代く官め  
ひま大成呵責を受く減姑も械と受く十指の肉をぐく脱せり二成田畠  
を質とすとやひてく慚く釋とて家へ帰る其後債家の催促よ  
堪じ是非良田を以て村中うる任翁と云者ふ齎く任翁田の半大

成が讓とて所あらず大成と呼く券の判をとて大成任翁うりふ至る時  
任翁忽氣色かたゞ大成ふ向く我をそ汝が父の安孝廉うり任某何  
者うりて今吾田地を買ふと云ふと云く又曰眞間汝夫妻の孝ふ感ト  
暫時放等ふ逢ふを赦せり大成曰父靈あむ候りバ吾弟を赦玉ア  
父曰逆子悍婦惜むあ足らざ汝家め帰らば速ふ金をとて吾血産を贖  
えり一大成曰母子辛うじく世をこことて何こふヨヌの金をなんや父の  
金一いじゆくをもふききとて金を置て取れと用ひべーと云ふ再問んとすと  
ひも入若らど任翁夢の醒る如く正氣付ゆど己が言ふるを知らぞ  
大成辭へて歸る減姑聞ふと入をむきて紫薇樹の下ふ往く室を登る  
見るふゞ磚石のみ有く金をす本意うり家へ帰ぬ大成是を聞く

母と妻と戒め往く視るるううととり入松より無事と聞く母宿  
徃く窺ひてか傳石土中の雜草あるのをもと遂に帰る珊瑚の言  
づきく徃く見る所土中悉く白鐵うち夫を呼んでせむる所果  
てぬあや大成より二成を召す均分且分ち各囊ふ入て帰りて  
夫が持帰る囊を廻りてか囊中より瓦礫のをあらむ皆人大駭く臧姑  
夫を兄の家ふ遣りて窺へ一むと兄金を几上ふ置く母と共に相慶す  
居入り入て兄があらぐと語り大成も大駭き此金を取て二成ふ與ふ二  
成徃く債家ふ返一兄の徳を賞を臧姑曰身ふ覺あらばそ誰う一旦分ち  
取所物と又あらぐく譲るの有んやと云く聊之を恩うりとせび次日債主  
が家入り僕來まく曰償所の金皆偽金うりて此吏官ふ訴へんと云ふ夫婦

色を失ひ中み臧姑曰我元もと兄の賢此やと至らうと想つては是  
まみ汝を殺さるの計ありと云ニ成大ふ恨むと債主徃くあがた田畠  
を賣りて券を渡し始の彼偽金と取て家ふ歸りて細ずる視みて缺乏切  
て改める銀二枚ある見見る所韭菜の如き薄き金ゆく銅を裏する物を  
臧姑ニ成と計て斷る物を己が家ふ留め餘り兄ふ返し送る大成其  
意を知らざりて再三讓りて受ぞ二成堅くいきとて置く去て大  
成此金を秤て見ると五両あらず少々珊瑚の命じて其數を満て  
め推りて債主の家ふ至りて弟が入て田地の代を償へ債主ニ成  
又似て疑ひて是を驗見る所紋色足らず相違有りて金を收  
め大成ふ券を返して是を又ニ成へ兄の金を還して後意入偽金



あはれむうと死るやうんと想ひ居るふ兄債主の金を還へ一舊業  
贖めぐらしすと聞く大之を奇む減姑又疑ひを生じて金を堀つゝ時大  
成先真金を得て隠あうべとく大成の家の徳とあざうぶ罵る  
大成此時漸宗が金を返す故と悟り知り珊瑚減姑と迎へて笑つゝ  
産へ固るも此不在何ぞ怒りをもろと云く夫とく券をかき減姑  
小腹こゑ遣り此夜二成が夢の父來と責へ曰汝不孝不弟あり一寸の地も  
汝が物と爲る非ざ然る參強とくをめ取んと云く怒る事甚と  
見く醒く後減姑の語アと田畠を兄の返さんと云々減姑愚慮うつて  
喰ふ時ふ二成両人の男子あと何ぞも無く長男痘を病て死たり減  
姑夫の夢を想ひ合せ恨とく二成とく券を兄の贈らむ大成安ぞ又

幾多とも無く次男又死名を減姑りと惧き自券を嫂の手に待ち往て  
置て帰すね春をふ盡んとすと田を耕す者あけと大成已更を得  
ぞと之を殖種減姑此より行を改め母仕と孝を致し嫂を敬ふも亦  
至是未半年を過ぎ母病て卒を減姑哭一慟トと曰姑早く死とく我  
とく事ふるの成ぬましむ是天我不孝の贖を許玉がる也とく哭  
けよ減姑産をうる十度あると皆育ふ遂に兄の子を以て子とす  
大成夫婦皆毒を以て終とすニ子を生る皆進士の舉ら家人是を  
孝友の報うと云う

## 通俗排悶錄卷之一軸

